

## 飼っててよかった

二年 三上亜紋

「姉の友達が、野良猫三匹拾ったんだって。」そのときはまだ、猫にはまだ興味がなかった。猫カフェでかわいいと思っただくらいだった。

「一匹ひきとろう。」

そのことを耳にしたとき、とてもおどろいた。急に猫を飼うと言われたら誰でもおどろくであろう。僕は急すぎてわけが分からなくなっていた。しかし、みんなはそのことに賛成した。僕は猫があまり好きではなかった。かみつかれたらいたいたいからである。猫カフェの猫はちゃんとしつけしてお客をかまさない。でも、僕の相手は野良猫だ。きつと凶暴でかみついてくるぞと思って僕は反対ぎみだった。

次の日の朝、姉が

「猫ちゃんもらってくるね。」

やはり急すぎる。猫が怖いと感じていた僕はきんちょうがとけない。しかし、どこかにうれしさがあつた。それは、新しい家族がやってくるうれしさだった。自分は一番下なので、弟や妹がいなかったからうれしいのかもしれない。そうこうしているうちに、箱をかかえた姉が帰ってきた。箱の中に猫が

いると思いのぞくと、まだ体が小さいかわいらしい猫だったのだ。でも、元気がなさすぎる。思っていたものと違う。と言ったとたんに野良猫だったことを思い出した。でもそんなに凶暴じゃないし、むしろ弱っているではないか。

急いで猫用ミルクを与えようとするが子猫ちゃんは飲まなかった。というより、飲めないのである。ほにゅうびんがないので母の帰りを待って買いに行くことにした。買ったあと、猫にミルクを与えようとすると、うまくかめない、のみこめないということがおきてとてもかわいそうな気持ちになった。母猫とすぐにはぐれてどうすれば飲むことができるのか分からなかったのだらう。でも猫は無事にミルクを飲むことができた。あつたかいミルクとあつたかいペットボトルで作ったゆたんぽを用意してねかせてあげた。

次の日、猫の目やにがひどくて野良猫でもあるのでノミや病気にかかっているかもしれないので病院にいつて診てもらおうと、かぜにかかっていた。でももう大丈夫。すっかりかん病してあげれば治るからだ。

ある日大雨が降ったとき、

「野良猫じゃなくてよかったね。」

と、言うのと改めて実感したことがある。それは、猫ちゃんを保護してあげたということ。もし誰にも拾われなかったら、と考えるとあのとき家にやってきてくれて良かったと思う。

姉がその猫をごまちゃんと言った。かんできたりひっかいたりするが、とてもかわいらしいので飼って良かったと思うことが何度もある。病院につれていったり、猫のケアするのは大変だけど、かわいいごまちゃんのためにこれからもがんばろうと思う。